

共謀罪への「声」 2



朝日新聞 6月21日「声」。福岡県 28歳の大学院生 — 昨年、安保法制に反対の声をあげたいと、街頭に出た。「黙れ」「うるさい」と言われるなら、まだいいほうで、ほとんどの人が迷惑そうな顔をして、私たちを避けて歩いた。その時に感じた、自分の声が宙に浮いて行き場を失っているような心細さ。

沖縄で働きながら、米軍基地移設に抗議して名護市辺野古の座り込みに通う友人がいる。学費を払えず、学校をやめてしまう後輩がいる。病気で仕事を辞め、高齢の父と2人で暮らす親戚がいる。私の身の回りにある、心細い声たちは、今の政権には届かない。

一方では、権力者の鶴の一声によって、安く国有地を買うことのできる人、国の規制を緩和してもらえる人もいるようだ。

私たちの声は、もうどこにも届かないのか。強者になるか、強者の「お友達」になることしか、声を届けるための選択肢はないのか。

「共謀罪」法案の強行採決の様子を見ながら、これからますます息苦しい社会が到来するのだと感じている。しかし、それでもなお、声をあげることが、誰かとつながることのできる希望であってほしい。そう思うからこそ、声をあげることがやめたくない。

神奈川県 22歳の大学生から — 「共謀罪」法案が、参院本会議で可決された、中間報告という特例を用い、委員会採決を省略する強硬手段をとったことに、私は強い憤りを感じる。するべき議論をせず、多くの疑念を残したまま多数決で押し切った与党の行為は、民主主義を冒瀆する暴挙だ。

安倍晋三首相は「国民の生命、財産を守るため、適切に、効果的に運用していきたい」と語ったが、強引な手法で通された法律が、国民のために運用されるとは思わない。国家のために効果的に運用していくつもりだ、という本音が透けて見える。

拡大解釈が可能で、冤罪を生む可能性が少しでもあるなら、徹底的な議論によって問題点を解消すべきだ。国民のためという強い信念をもつのなら、正々堂々攻撃を受ければいい。聞く耳を持って、まずは議論をしてほしい。

国会答弁の場で、首相は野党の質問に「印象操作だ」と言って幾度となく逃げた。自身に向けられた疑惑から逃げて逃げて採決にこぎ着け、ついに逃げ切った。議論の場である国会を何だと思っているのか。「共謀罪」法の廃止に向けて、私たちは闘い続けなければならない。

@二人の若者の声から元気をもらった。声をあげ続けることの大切さも学んだ。

(2017年6月26日)